✝

2023年

7月 第1・2週の主日礼拝説教要約

・7月　2日：マタイ福音書　5：13－16．

『　地上のつとめ　』

・7月　9日：マタイ福音書　5：33－37．

『　然りと否の教え　』

衣笠病院教会　牧師　宮原晃一郎

≪　地上の務め　≫

マタイ福音書の５章からはじまり、７章で終わるイエスの長い説教を、“山上の垂訓”などと申します。その中に出てくる印象深い言葉の一つとして、５章１３節以下に謎めいた言葉が記されています。

あなたがたは地の塩である…
あなたがたは世の光である…

これらはイエス・キリストの言葉に留まる者達のあるべき姿として語られます。さしあたり、この時は１２人の弟子たちに向かって語られたものと思われます。

塩はなによりも生きるための塩分補給源、料理の味付け、また今も昔も保存料（防腐剤）として、さらに古今東西、清めの儀式にも欠かせないものです。

人間の世界に、日常生活に、また人生に欠かせないものの筆頭が“塩”です。どうやらイエスは弟子たちに、「あなたがたは地上にあって“欠かせないもの”となりなさい」と言っているようです。ただ生きているだけではなく、世の腐敗を食い止め、これを糺し、清めるための“地の塩”となること。さらにこれが増強されるためにも“言葉（＝福音）”の保存と宣教とが求められていると解する人もいます。

さて、次は“光”です。光は塩とは趣を異にします。光をあてれば、きっと塩の結晶や岩塩は輝くことになるでしょう。しかしこれとは関係なく、イエスは弟子たちに語りました。あなたがたはこの世にあって“輝け”、この世を“照らせ”と。

天地創造で神が最初に創り出したのが天と地の原形（混沌）であり、その次に命じて出現したのが“光”でした（創世記１：１－３），塩の創造に関する記述はありません。この時の“光は”天文学のビッグバンのイメージとも重なりますが、聖書では天地の原形の創造の後に“光”が出現しており、同時とは言えません。

光に関しては、ヨハネ福音書が一番詳しく説明しています。先ず第１章

で“光”は本来、神や言葉と本質的に不可分のものとして在ったことを教えます。ただ、その“本質”が、神ではない人間に、求められると一体どうなるのでしょう。例えば、洗礼者ヨハネはイエスとは異なり断じて「光ではなく、光について証をする」者であったと念を押されています。人間を“照らす”神と、神から“照らされる”人間の性質は大きく異なり、この関係は変わりようがありません。さて、同書の１２章３５－３６節には以下のように記されています。

光は、今しばらく、あなたがたの間にある。闇に捕らえられることがないように、光のあるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。

ここに、マタイ福音書に記された“謎”の答えがありそうです。弟子たちに求められる“世の光”とは、おそらく“光の子”となり、光り輝いてこの世の闇を制し、人々の善き模範となり、賜物としての地上の務めを果たすことが求められているようです。

≪　然りと否の教え　≫

あなたがたは「然り、然り」、「否、否」と言いなさい。それ以上のことは悪から生じるのだ。

（マタイ福音書５：３７）

今日の聖書の箇所は、そう締めくくられています。これは神の独り子の語った“処世訓？”、それとも“極論？”でしょうか。どうみても日常会話には馴染めない態度です。

もちろんこれは日常会話の模範ではなく、イエスの、弟子たちに対する「一切、誓うな」という命令の文脈で、最後に念を押されて語られたことでした。

家庭や教育現場では、例えば“非行”を繰り返さないための“誓約”が求められることがあるかもしれません。大人の世界でも仕事上のミスや契約違反が発覚した場合に、公式な謝罪や“誓約書”が違反者に課せられることがあります。

スポーツ競技等では“正々堂々”戦うことを誓えば、もうそれだけで充分です。いずれにしても、“誓約者”には一定の行動制限が設けられることになりそうです。

すると、そうならないことが求められた時には、どうすればよいのでしょう。先ず第一に“誓わないこと”、そのときイエスが弟子たちに命じたのがこれです。イエスなき後に、当局による弟子たちに対する弾圧や摘発が次々に発生した時の心構え、さらには何よりも神に対する信仰的態度を継続するための精神の在り方として。

言葉を控えよ…言葉が増せば愚かな者の声になる。神に誓いを立てたら、果たすのを遅らせるな…誓いを立てて果たさないなら、誓いを立てない方がよい。（コヘレトの言葉５：１ｃ－４）

イエスの教えと、ほぼ同じです。神に対する誓約を完全に果たせる人間など存在しません。また、神への巧言令色は通用しません。そんな“愚か者の声”には耳を傾けてくださらないのが神です。無理をする必要も能力も、人間の側には無いのです。“汝自身を知れ”と神が人間に命じているのと同じです。この世の、地に足の着いた生き方とは、いつでも何処でも「然り、然り」、「否、否」。これ以外の対応は全て神に委ねる。真の信仰とは、そういうものなのかもしれません。